



Title	沖縄の災害情報に関する歴史文献を主体とした総合的研究(琉球災害史覚書 (高良))
Author(s)	高良, 倉吉; 山里, 純一; 豊見山, 和行; 真栄平, 房昭; 赤嶺, 政信; 狩俣, 繁久
Citation	
Issue Date	2008-03
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/8987
Rights	

琉球災害史覚書——地震・津波の発生状況概観

高良 倉吉

I 本研究の問題意識

前近代、すなわち琉球王国時代に書き記された文献記録を渉猟し、その中に記述された自然災害に関する記事を収集してデータベースを作成するのが本研究の目的であった。文献リサーチにあたり、大雑把ではあったが、以下の選択基準を設定した。

- ①自然災害関係——地震・津波・台風・潮害・旱魃・動物異常発生・その他
- ②気象関係——天候・異常潮位・異常気象・その他
- ③人文関係——作物生育状況・餓死状況・備荒状況・その他

この基準には、自然災害史という概念を幅広くとらえ、地震・津波に代表される典型的な自然災害のほかに、人びとの暮らしを規定する自然界よりのネガティブインパクトを浮き彫りにしたいとの意図が込められていた。あるいはまた、王国時代の人びとの生活に対する自然圧力状況を展望し、「自然災害と人びとの生活」という問題を俎上にのせたいとの意図も含まれていた。そのために、正史・由来記・系図家譜などの王国時代に作成された主要文献のほかに、現時点において参照可能な行政文書や編纂物などの諸文献を対象とし、関連する記事を収集することとした。

こうした課題を設定したのは、自然災害史研究がもっぱら地震学・地質学・古気象学などの自然科学分野の研究にとどまり、人文社会科学分野における仕事だとは意識されていないという反省が込められている。長期的なスパンに立つ経年的な情報をぬきに沖縄（琉球）地域の自然災害発生状況の特質をとらえることは不可能であり、その情報を基礎とする災害予知や防災研究もまた議論できないと考えたためである。自然科学分野が蓄積してきたところの沖縄（琉球）災害史情報に対して、人文社会科学分野の情報をリンクし、情報精度を高める努力をする必要がある、と考えたのである。そのことが、人文社会科学分野の責務であるとも自覚した。

この企てを補完するものとして、文献情報のほかに自然災害に関するまじないや民俗、方言の問題も取り上げた。

II 地震・津波の発生状況

文献データベースをふまえた自然災害の全般的な発生状況を総合的に検討し、その具体相を明らかにするとともに、年代が判明している記事を網羅的に整理したところの年表作成は今後の課題としたい。そのかわり、ここではさしあたって文献記事より抽出できる主な地震・津波の発生状況に関して年代順に整理し、「付録：琉球災害史略年表（地震・津波を中心に）」を作成した。それをもとに若干概観しておきたい。

(1) 17世紀発生の記事

①1664年の硫黄島における地震

『球陽』尚質王 17 年 (1664) の条は「鳥島、地震ひ風暴し、沙を飛ばし、波を起し、石燈を吹き出す」との見出しで要旨次のように伝えている。鳥島で地震が発生し島が激しく揺れた。午後 4 時頃に激しい強風が起こり、海中より「石燈」が噴出し、波に乗って浜に寄せた。ほどなく「沙」や「石」を飛ばして村の民家を破壊した。また、漁船は 4、5 尺 (約 152~190 センチメートル) の土中に埋まった。婦人 1 名が「石礫」に当って死亡。これを見た島人は深い洞窟に避難し事なきを得た。この一件が首里王府に報告されてきた。と。(球陽研究会編『球陽』読み下し編、1974 年、角川書店、194 ページ) 残念ながら、『球陽』は地震発生の月日を記していない。

②1667年の石垣島における地震

その 3 年後の 1667 年に八重山で地震が発生したことを『八重山島年来記』が伝えている。康熙 6 年 (1667) のこととして、「この年、大地震これあり。島中の所々が崩れ、大川村ならびに水汲女を埋め候につき、人夫をもって掘り出す。それより釣川に召なし候なり」という。石垣島を襲ったとみられるこの地震により、島の各所で被害が出て、特に大川村では村と女性が埋没したので救出活動が行われたといい、その後は湧水源 (おそらく洞窟状のいわゆるウリカー) が「釣川」(釣瓶で水を汲む井戸状の水源) として利用されることになったという。(『沖縄県史料』前近代 1、1981 年、沖縄県教育委員会、283 ページ) 地震発生の月日は記されていない。

③1687年旧暦 9 月 16 日の与那城間切における津波

『球陽』尚貞王 19 年 (1687) によると、旧暦 9 月 16 日深夜の丑時 (2 時前後) に、与那城間切で「海水漲退」現象が 3 度起こった。「忽然と漲満すること八分、忽然退去して尽く乾く」と記しており、「四次に至りて漸々漲満すること常と異なる無し」という。(『球陽』読み下し編、222 ページ) 短い記述ではあるが、津波が与勝半島の東岸に襲来したことを伝える記事である。

主要文献記録によって確認できる 17 世紀に起こった地震・津波の記事は以上の 3 件であるが、その規模および被災範囲を厳密に推定できる手がかりは含まれていない。

(2) 18世紀発生の記事

④1714年旧暦 11 月 12 日の黒島における津波

18 世紀発生の記事としては、『八重山島年来記』康熙 53 年 (1714) がある。旧暦 11 月 12 日に黒島の迎里に「大波」が上がり屋敷囲いなどを「打ち破り、二歳になる童一人が溺死」と短く記述されている。(『沖縄県史料』前近代 1、291 ページ) 屋敷囲い (石垣もしくは生垣・竹垣) を破壊し子供 1 名を溺死させたというのであるから、「大波」は明らかに津波のことだと思われる。

⑤1768年旧暦6月9日の沖縄島における地震・津波

『球陽』尚穆王17年(1768)によると、旧暦6月9日の午(12時前後)の刻を過ぎた頃、「大地震」が起こった。首里城の城壁が数十箇所、三箇寺(円覚寺・天界寺・天王寺)・玉陵(玉御殿)・極楽陵(浦添ようどれ)の石垣の所々が破壊された。その他の地域・施設にも被害が出た。地震は収まったものの、「潮水常ならず、或いは二、三尺(約76~114センチメートル)ばかり、或いは三、四尺(約114~152センチメートル)ばかり、内港に揚入して再三満退す」という。未の刻(14時前後)に津波は終息した。座間味島の座間味村と阿佐村では海岸近くの農地が所々で、民家9軒が波により被害を被ったという。(『球陽』読み下し編、367ページ)

この地震・津波が発生した当時、首里城の正殿(百浦添御殿)の大修理工事が施工されていた。前年(1767年)旧暦9月3日に起工し、この年の旧暦6月竣工した。(高良倉吉「首里城正殿に関する建築史年譜」、1988年、『沖縄県立博物館紀要』14号参照)工事完工まで大美御殿に仮住まいしていた国王は、新造の城に遷御している。ということは、地震発生時に正殿の修理工事は終了していたが、城の城壁は崩落したものの建物の被害はなかったことになる。

⑥1771年旧暦3月10日の両先島における地震・津波

地震とその結果として発生した大津波が、八重山・宮古に未曾有の被害をもたらしたことで知られる。この地震・津波に関しては多くの調査・研究があるので、ここでは解説を割愛する。牧野清氏の著書以来「明和の大津波」の名で呼ばれ流布してきたが、琉球前近代史上の出来事に和暦名を使用していること(琉球王国時代は唐暦が原則である)、災害実態にそぐわないことなどの理由により、今日では「八重山地震津波」を使用する例が多い。

(3) 19世紀中期までの発生の記事

⑦1842年旧暦3月5日~14日の宮古・多良間における地震

『球陽』尚育王8年(1842)によれば、旧暦3月5日より14日に至るまで数十回におよぶ地震があった。5日に1回、6日に1回、7日に5回(昼3回、夜2回)、8日に7回(昼4回、夜3回)、9日に9回(昼5回、夜4回)、10日に15回(昼9回、夜6回)、11日に5回(昼2回、夜3回)、12日に13回(昼6回、夜7回)、13日に6回(昼4回、夜2回)の発生回数という。多良間島では旧暦3月7日より13日まで毎日2、3回の地震があった。宮古島在番より王府に「常と異なる無し」という趣旨の文書による報告があった。(『球陽』読み下し編、525ページ)

⑧1854年旧暦7月11日の多良間島にける地震と異常潮位

『球陽』尚泰王7年(1854)によれば、旧暦7月11日午から未の刻に「大風」が2度襲来したが、未刻を過ぎた時間に「地陥りて潮湧く」という。驚いた島民たちは丘に避難したが、さいわいに潮がやがて退いたので家に帰った。(『球陽』読み下し編、581ページ)

⑨1863年旧暦10月~11月の異常潮位

『球陽』尚泰王16年(1863)によれば、旧暦10月より11月までの間、「江潮満つる

こと少く、尋常と異なること約一尺二三寸許り」という。『球陽』読み下し編、636 ページ) 特に地域を指示していないが、あるいは琉球全体に見られた現象だろうか。「江潮」は海水のことだと思うが、それが約 1 尺 2、3 寸 (約 38 センチメートル前後) 程度も退いた状態が長期にわたって継続した。異常潮位の例だと推定したい。

⑩1867 年旧暦 9 月 25 日の宮古島・多良間島における地震

『宮古島在番記』同治 6 年 (1867) の記事によると、旧暦 9 月 25 日に (おそらく宮古島で) 「大地震」があり、人家囲石・井川洞が各所で崩壊し島中が騒動になったが、特に大きな被害はなかった。多良間島でも同様に地震があったが、やはり大きな被害はなかった。

(『沖縄県史料』前近代 1、217 ページ)

⑪1882 年新暦 7 月 15 日の沖縄島南部における地震

1882 年 (明治 15) 新暦 7 月 15 日午前 1 時～2 時、沖縄島南部で地震が発生し人家石垣や首里城跡の城壁などが崩壊したが、負傷者・死者はなかった。詳しくは加藤・森 1995 を参照。

III 若干のコメント

以上に紹介した 11 件の記事を 17～19 世紀の幅で、しかも各世紀 100 年を前半 50 年・後半 50 年に区別して一覧すると以下ようになる。

17 世紀前半 (該当記事なし)

17 世紀後半 ①硫黄島島の地震 1664 年 ②八重山の地震 1667 年 ③沖縄の津波 1687 年

18 世紀前半 ④八重山の津波 1714 年

18 世紀後半 ⑤沖縄の地震・津波 1768 年 ⑥八重山・宮古の地震・津波 1771 年

19 世紀前半 ⑦宮古の地震 1842 年

19 世紀後半 ⑧宮古の地震・異常潮位 1854 年 ⑨不明の異常潮位 1863 年 ⑩宮古の地震 1867 年 ⑪沖縄の地震 1882 年

これで見ると、文献記載が不備な 17 世紀前半を除くと、異常潮位を含め 250 年間で 11 件、50 年平均で 2.2 件の発生ということになる。このうち被害規模の問題を捨象して死者が発生した災害のみを数えると 3 件である。3 件のうち 2 件は死者各 1 名であり、他の 1 件は 1771 年の八重山地震津波である。ということは、1 万人余の犠牲者が出た八重山地震津波が琉球災害史上いかにきわだった被害だったかが判るのであり、文字通り未曾有のこの災害に匹敵する事例は文献資料に今のところ登場しない。

地震多発地帯と比較すれば 50 年に 2.2 件とういうのは確かに少ないが、しかし、その頻度の地震・津波・異常潮位が発生していることを銘記することが重要であり、沖縄 (琉球) がこれらの災害の空白地帯ではけっしてない、との事実認識が大事だと思われる。

率直に言うならば、本研究が目標とした課題の多くを積み残した。人文社会科学分野の真価を発揮できる研究は、今後の課題としたい。

付録：琉球災害史略年表（地震・津波を中心に）

1664	硫黄島島で地震が起こる。(球陽)
1667	大地震があり島中の各所で崩壊。(八重山島年来記)
1687	宮古島で3度異常潮位あり。(球陽)
1689	7月、八重山にバツタが異常発生し作物に被害。(八重山島年来記)
1714	11月12日、八重山の黒島村迎里に大波が揚がり屋敷囲いなどを打ち破り、2歳になる子供1名が溺死。(八重山島年来記)
1768	6月9日昼過ぎに大地震が起こり王城の城壁や三箇寺・玉陵・極楽陵の石垣が壊れる。津波が発生、慶良間島も被害に遭う。(球陽)
1771	3月10日5ツ時分地震が起こり干瀬に波がぶつかる激しい音がしてまもなく東から大津波が揚がる。奉公人・百姓を合わせ9,400名余が死去。新川・石垣・登野城・大川・平得・真栄里・大浜・宮良・白保・伊原間・安良・桃里など14村が引き流される。11月から虫が発生、イモの葉を食い尽くす。(八重山島年来記)(球陽)(御使者在番記)現存する八重山家譜に犠牲者名が登場。(山陽・上官・長栄・錦芳の各氏)この年の津波に関する「大波之時各村之形行書」「大波寄揚候次第」が伝わる。
1774	八重山では去年の数度の大風で諸作物に被害、虫の被害が重なり9、10月から稀に見る大飢饉となり餓死者が多数。(八重山島年来記)
1805	大雨が降り真壁・具志頭・高嶺・喜屋武では大小の雹が降る。(球陽)
1815	12月9日から12日早朝まで伊平屋島に、久米島にも暴風が起こり雹が降る。(球陽)
1832	大風・大水により船舶990隻が損壊、役所・寺院・水田・川べり・道路・作物に被害。玉城では大波が起こり人家7戸浸水、久志では10名死亡。(球陽)
1854	6月30日、8月21日の2回、多良間島に「嵐」来襲。これにより胡麻・木綿花が大きな被害を受けたが、小豆・芋などは軽微の被害。(多良間往復文書控)
1842	宮古で3月5日～14日まで十数度の地震あり。多良間でも3月7日～13日毎日2、3度の地震あり。(球陽)(宮古島在番記)
1844	7月6日～7日宮古で無比の暴風。人家2,180戸損壊、死者9名。(球陽)
1852	宮古島で種々災害が起こり大飢饉、餓死者多数。(平良市史3・8巻)
1854	多良間で地が落ち潮が湧く、島民は丘に上り避難。(球陽)
1858	8月～12月、1日に7,8回あるいは5,6回も地震が起きる。(球陽)
1862	5月1日晚から2日にかけて多良間島に「嵐」来襲。同8日夜から翌日にかけて大雨交じりの風が吹き作物に被害。(多良間往復文書控)
1863	10月～11月、異常潮位が見られる。(球陽)
1865	3月、高嶺・東風平・具志頭・玉城・南風原・大里・久米島などに雹が降る。(球陽)
1867	9月25日大地震起こり人家・井川・洞など崩壊、多良間も地震。(宮古島在番記)
1882	7月15日午前1～2時、沖縄島南部で地震が発生。那覇・首里で石垣崩壊約500箇所、首里城の城壁が90mにわたり崩壊。負傷者なし。那覇で震度5と推定。(加

	藤・森 1995)
1898	1896～98年の八重山の地震・獣害のルポ掲載（琉球新報）
1909	8月29日午後7時30分頃、沖縄島で地震が発生。死者2名、負傷者13名、石垣崩壊1,021箇所、家屋全壊7戸、半壊9戸。（加藤 1997）
1924	10月31日発生 of 鳩間島付近海底爆発の記事を掲載。（八重山新報）

（注）主に地震・津波の発生状況を概観する目的で作成。

（たから・くらよし 琉球大学法文学部教授）